

ようねんしょうか しんさくしょうか

#11 幼年唱歌／新作唱歌

著者：吉丸一昌（よしまる・かずまさ 1873-1916）

刊行：明治45年（1912）-大正4年（1915）



※左より、『幼年唱歌 第一集』、『新作唱歌第一集』、『新作唱歌第三集』、『新作唱歌第十集』

♪ 解題

■ 内容

『幼年唱歌』第1集は明治45年（1912）7月敬文館から発行された。巻頭の例言に「本書は児童の音楽遊戯の資材にもとて余が感興の湧くに従って作歌したるものに、諸友人が作曲したるものなり。（中略）本書は初集にして、追次二ヶ月或は三ヶ月に一度づつ分刊する豫定なり。」と記されており、「手毬と紙鳶(たこ)」「達磨さん」など生活に密着したテーマを多く取り上げている。

第3集より『新作唱歌』と改題し、対象を「幼稚園、尋常小学校、高等小学校、中学校、高等女学校程度」に拡大し、第10集まで刊行された。代表作「早春賦」（中田章作曲）は、第3集に収録されている。第4集からは巻末に簡単な器楽曲が加えられた。これは、表紙絵にもあらわされており、第1集・第2集は子どもが歌っている図であるのに対し、第3集は中学生程度の年頃の子らが楽譜らしきものを覗いており、第4集以降は女性が楽器を演奏している姿が描かれる。第6集以降は「滑稽歌曲」というジャンルが加わる。大正4年（1915）10月までに全10集が刊行され、版を重ねた。全75曲。器

楽曲を除く収録作は全て吉丸一昌が作詞しており、中田章や梁田貞など、東京音楽学校出身者で当時新進気鋭の邦人作曲家による38曲と、外国曲29曲、そして器楽曲8曲が収められた。全曲に伴奏が付されていたことが音楽愛好者に喜ばれ、堀内敬三著「音楽五十年史」には「この集以後に出る曲集は児童曲でも多くは伴奏附になっている」と記されている。

子どもらしい発想、親しみやすい口語体、滑稽味のある詩は、吉丸が編纂委員を務めた『尋常小学唱歌』が教育的見地を第一とする方針とは異なっており、大正7年(1918)童話童謡雑誌「赤い鳥」創刊をもって本格的に開始したとされる童謡運動の先駆けと言われている。

■ 作者

作詞の吉丸一昌については、人物コラム6(p.39)参照

■ 滑稽唱歌(滑稽歌曲)

『新作唱歌』第6集の緒言に「本書は(中略)悉く滑稽歌曲のみなり」「次集には外人の滑稽曲を選び、當第6集及び第7集を以って日英独の滑稽歌曲集たらしめんとの豫定なり」とあり、以後9集まで緒言で滑稽歌曲に触れていて、吉丸が滑稽歌曲というジャンルを重要視していたことが察せられる。

♪ 類似の唱歌集

- ・『幼年唱歌 第1・2集』敬文館 1912 [SH375.97/36/1] (合冊製本)
 - ・『新作唱歌 第3～10集』敬文館 1913-1915 [SH375.97/36/2] (合冊製本)
 - ・『新作唱歌 第1～9集』敬文館 1914-1915 [SH375.97/37] (合冊製本)
- ※第1・2集(4版(幼年唱歌改題))第3・4集(3版)第5・6集(再版)第7～9集(初版)の合冊

♪ 参考文献

- ・『音楽五十年史 上・下』堀内敬三著 講談社 1977 [762.1/37/1・2]
- ・『日本童謡音楽史』小島美子著 第一書房 2004 [767.7/227]
- ・『童謡百年史』井上英二著 論創社 2018 [767.7/254]